



斐济政府公認の
公式留学プログラムとして発足

斐济に留学している高等部
1年生の3人が、夏季休暇を利
用して斐济で最も伝統のある
村であるビセイセイ村で10日間
のホームステイを経験するととも
に、日韓映画祭を開催（主催・コリ
ア国際学園／協力・駐斐济日本
大使館、駐斐济韓国大使館）
する重責を担いました。そのサ
ポートに駆け付けた私は、彼・彼女
らが生き生きと急速に語学力やた
くましさを身につけ、「まだまだ日
本に戻りたくない！」と笑顔を見
せる3人の姿に大きな感動を受け
ました。

KISが斐济教育省、留学

先のサンガムSKMカレッジとの

正式協議を行う2年前、斐济

政府は韓国からの留学生就学ビザ

の発給を停止・失効させていまし
た。卒業直前だった高校や大学の
韓国留学生は泣く泣く帰国してい
たのです。その決定の背景には、
留学生を頼つて訪問する家族の滯
在資格やビザの偽造が続発したこ
とへの措置であつたと聞いていま
す。

こうした状況下で、韓国国籍を

有するKISの生徒の斐济留学
プログラムがスタートできたの
は、在日本斐济大使館、元駐斐
ジ大使であるモモエンドヌ氏ら多く
の政府関係者の応援があつたから
です。KISの留学プログラムが
斐济と韓国との間で暗礁に乗
り上げていた二国間関係の扉に風
穴を開く一つの契機になつたので
す。

斐济政府公認の公式留学プロ
グラムであり、日本の学校とし
て初めて斐济共和国に生徒を
送り出す栄誉を得たKIS。斐
济留学のお手本もない初めての
試みに多くの苦難やトラブルなど
を乗り越えていった3人の頑張り
を称えたいと思います。

多文化・多民族・多宗教の国、オ
セアニアの国際政治の中心である
斐济での日々は海外経験を多
少持つ大人でも驚くことの連続で
す。逆に学べることも膨大です。
なかでもマイノリティ・グループ
であるインド系斐济人、ヒン
ズー教徒の教員や生徒の多い名門
校での日々の学習や生活は、「越境
人」として成長していくこうとする



KIS生にとっては最高の学び舎であることは間違ひありません。

KIS留学生たちのたくましい姿

夏期休暇中にインド系学校の生徒から抜け出し、今度は全く異質なフイジー系コミュニティ、フイジー人の村であるビセイセイ村での10日間のホームステイ。先のモエンドヌ氏が部族長として取り仕切る村ですから「国賓待遇」といつても過言ではないでしょう。

海辺の伝統的なフイジー人の生活を営むビセイセイ村は、海外からの観光客が観光スポットとして立ち寄るほど。そこで大歓迎された村中の子どもたちに取り巻かれた楽しい日々、美しいキリスト教会での日曜ミサ、観光客が絶対味わえないフイジー郷土料理や夢のような村での時間に3人がどれほど感動したかは彼らの話を聞くとビンビン伝わってきます。

「ステイ受入をしてくださった、

素晴らしい時間をくださった村人

に何かお礼しない? 映画会が受け

るよ?」

このアイデアに燃え上がった3

は、成功裏に終えることができました。日本大使館が行つた当日アンケートには「素晴らしい映画祭だった」「恒例行事にしてほしい」との感想が多数寄せられました。なによりも百数十名の押し寄せた村人たちの前で堂々とスピーチを行ない、司会・進行を担つたKISの留学生3名の生き生きした、たくましい勇姿に目頭が熱くなりました。

夏期休暇中の充実した

体験学習プログラム

ビセイセイ村での映画祭を終えたあと、3人の留学生はフイジーをはじめ南太平洋諸国を熟知し、KISフイジー留学チームのアドバイザーである佐藤真由美さん（国連開発計画元職員）と私をコーディネーターに各地の体験学習プログラムに臨みました。

かつての太平洋戦争時に、フイジーに侵攻した日本軍を迎撃つために建てられた砲台「モミ・ガン戦跡」、オセアニアにおける奴隸狩り「プラック・バーディング」の子孫ソロモン人コミュニティ訪問（白人農場主に椰子のプラ

堂々たる3人の高校生の英語でのスピーチ、クイズ大会と続き、日本大使館による紹介資料100部があつという間になくなりました。茨木市人権センターなどのプレゼントやアニメグッズなどの配布で大盛り上がりのなかで、日本のアニメ映画「ブレイブ・ハート」と「韓国の世界遺産」の映画上映会でした。

ンテーションに追い立てられライフルの狩猟ゲームの獲物の代わりにされた、現在でも最底辺で差別されている人々の都市スラム）、日本軍の強制移住・大量虐殺の生き証人「バナバ民族」スバ事務所訪問、障がい児学校訪問、南太平洋一円の女性人権NGOスバ事務所訪問、周辺15カ国・地域で創設・運営されている南太平洋大学訪問、ウミガメ保護や環境教育に力を入れるリゾート・アイランド「マナ島」訪問など。

多文化共生と人権・平和などのKISの教育理念と、フイジーの多

様で豊かな教育資源をつなぎ合わせながら企画されているKISのフイジー体験学習プログラムは、持続可能な社会の実現に寄与する「越境人」を育成していく上で、きわめて先進的な試みであると言えるでしょう。

そろそろ留学のラストスパートの時期にさしかかっています。「環境や人権のボランティアをしたい」「まだまだフイジーにいたい



「もう一度ビセイセイ村訪問やスティをしたい」心からの今の思いを留学生たちはぶつけてきています。

12月の帰国前には再びビセイセイ村でのホームステイとボランティア活動、そして5日間ほど的是ラム寄宿舎制学校での体験入学のプログラムが企画されています。こうしたフィジー留学プログラムは、現在KISが高等部2年・3年生対象に導入を図ろうとしている国際バカロレア（IB）の学びとも相互作用しながら発展していく大きな可能性を秘めています。



フィジー留学生VOICE

フィジーに留学してから10ヶ月ほどがたち、3人の留学生たちは英語力も向上し、たくましく成長しています。留学生の高等部1年生の野村透生くん、安原亜海砂さん、佐藤美優子さんからフィジーでの学校生活や感想などを素直に語ってもらいます。

フィジーでの生活はどうですか？

佐藤 留学先のサンガムは生徒が千人以上いるし、最初はその迫力に泣きました（笑）。慣れるまで本当に大変でした。何回も日本に帰ろうか考えたほどです。でも、そのたびにたくさん的人が支えてくれました。学校では直に語つてもらいます。

野村 辛い時に友だちがいつも助けてくれました。僕にとって友だちは、かけがえのないもので、いなければこの

アジア太平洋の時代と言われて久しい。KISの留学プログラムは単なる語学留学という通常の枠を越えたユニークな教育実践です。今後、フィジー共和国との連携や交流をどのように日々の教育にフィードバックしてゆくのか。また、交流のパイプをどう生かし太く内実のあるものにしてゆくのか、学校と教職員の真価が逆に問われています。

日本社会では南太平洋諸国のイメージは、「南の楽園」としての観光地しかありません。しかし、そこには多文化共生、日本との歴史・戦争の記憶、貧困・開発問題、世界の南北問題、環境問題など、まさに世界史的な課題が集約している地域と言つても過言ではありません。ここから実践的な「パシフィック・スタディーズ（太平洋学講座）」「イスラミック・スタディーズ（イスラム学講座）」の講座設置も構想できます。フィジー留学プログラムは、アジア太平洋に視野を広げたKISという小さな学校の壮大でドラマチックな挑戦の第一歩でもあるのです。

（文責：フィジー留学
チームアドバイザー 北口学）

フィジアンとインド系フィジアンとの「壁」があり結構大変でしたが、私は留学生なので開き直り、双方に友だちをつくりました。

安原 フィジアンはすべてのことをシェアするのがライフスタイルです。例えば、ランチの時間に、何も言わずにお弁当をみんなで食べ始めるのです。フィジアンの生き方は、明日のことでも悩むのではなく「今」を楽しむことで生き方。うらやましい。学校生活では最初自分の英語力の低さに驚いた。でも、みんなが温かくサポートしてくれました。こういう環境で学べて本当に幸せでした。

野村 日本の場合、休みになると外に遊びに出かけますが、フィジーの場合は休みになるたびに家で休みます。慣れるのに時間がかかりました。学校生活でも困っているときはいつも周りの人人が助けてくれました。

安原 いま世界には、貧しくて今日生きるのに精いっぱい勉強したくてできない子どもたちがたくさんいます。それを思うと私の悩みが小さく感じて、私以上に大変な環境で一生懸命に頑張っている人がいるから私も頑張らうと思います。このような環境で学べて、親に感謝したいです。

佐藤 映画祭では、クイズの景品に日本のお菓子や小さなおもちゃを配りました。最後には、子どもたちが群がりました。嬉しかった半面、複雑な気持

夏休暇でホームステイしたビセイセイ村や映画祭の印象は？

まで頑張れませんでした。

佐藤 生活様式や食事などフィジアンとインド系フィジアンの違いを体験できました。インド系フィジアンは歴史的にも苦労してきたぶん、将来を見ています。フィジアンは、今日を楽しみながら生きる生き方をしています。

野村 とにかく面白かった。ビセイセイ村はフィジアンが初めて上陸した村として歴史のある村です。自分たちの文化や、伝統、習慣を大切にして生活を送っている姿が印象的でした。

安原 人が人らしい生活をしている村です。村人が優しくて、困っている人がいたらシェアをする、助け合いの精神が強い。とにかく村人の底抜けに明るい性格と笑顔が印象的でした。

今回、映画祭を開催できたことは、自分の自信に繋がりました。事前に村の家を一軒づつわり宣伝をしたり、村の教会で広報させてもらったり、すこく楽しかったです。

佐藤 映画祭では、クイズの景品に日本のお菓子や小さなおもちゃを配りました。最後には、子どもたちが群がりました。嬉しかった半面、複雑な気持



KISのフィジー留学に関わって

佐藤真由美



花谷卓治・駐フィジー日本大使(中央)と記念写真。(左端は筆者)

フィジー共和国との関わりは国営航空『エア・パシフィック』社の幹部社員として15年以上前からのお付き合い。米国で大学院を出た後に欧米の航空会社で仕事をして来た経験と知識を評価されて。私は元英領であることから親しみと期待を胸にフィジー共和国に関わることとなりました。

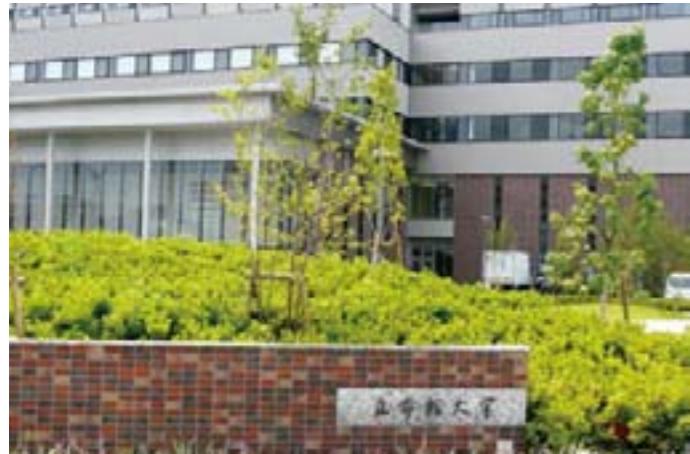
英米の社会で通算20年、大手航空会社で20年以上働いてきた私は全世界の多様な場所を訪問した経験もあり、様々な社会や人々と出会ってきました。そして惚れ込んでしまったのです、この国とこの国の人々に。世界に比類ない優しさ、ホスピタリティ、安全性、大自然の美しさ、総合的に考えても私にはフィジー以上の素敵な社会と人々を思いつきません。

世界の途上国に生きる地方・田舎で出会う人々は素朴で素敵、温厚です。しかしフィジーのそれは桁外れなのです。

キリスト教もヒンズー教もイスラム教もフィジー独特の変容を見せ、多文化共生のたぐいまれなハーモニー、國の有り様は旧来のフィジー部族社会システムをそのまま英國植民地政府が温存させたこと、豊富な食物や資源がフィジーに住む人々と社会をこれほど素敵に作り上げたのだと私には思っています。

古来からの互助社会システムと部族長を頂点とする伝統社会システムの大部分を脈々と継承しながら流血の政争や民族間の憎悪を回避し多民族多文化社会という特殊な国際国家であるフィジーはKIS留学生に生涯忘れられない思い出と、平和を構築し国際社会で生きてゆく上でかけがえのない多くの経験を日々重ねさせてくれる最高の地です。ファイト！KIS理念からみて、こんなに素敵なかつたです。

Profile ● 米英などの大手航空会社勤務を経て、2009年国連開発計画ニューヨーク本部に勤務。アフガニスタン復興支援プロジェクトに参加。その後、外務省アジア・大洋州課で南太平洋諸国との国際交流・経済交流などに関わる。KISフィジー留学チームアドバイザー。



哲学カフェへ紡ぎだす言葉に同じものがない

哲学カフェとは、コリア国際学園の生徒・先生方を中心に、大学生や地域の方々といった、年代も性別も環境も異なるさまざまな人たちが集まり、一つのテーマを軸に、それぞれの立場を越えて対話する、心休まるひとときのことです。今まで5月19日と6月13日に開催され、後者の哲学カフェは大阪大学未来戦略機構の大学院生らとの協働事業でもありました。

「成長とは何か?」「絶対的な悪は存在するのか?」「人を好きになることはどういこうことか?」等、参加者が気になっていることや話し合いたいことをテーマに掲げ、考えを共有してきました。すべて普段の生活では気に留めるとのないような当たり前のことでも、もちろん明確な答えはありません。

このような問いに対し、今までの自身を振り返り、漠然とした想いを言葉に表したり、また、他人の考えに共感したり、自身の考え方と比較することで、物事の新たな面が発見できたり、今までと違う

茨木モスクへの訪問へ当事者と直接交流することの大切さ

6月13日、哲学カフェが終わつたあと、私たちが企画した「イスラム

哲学カフェへ紡ぎだす言葉に同じものがない

視点から捉えられるようになったります。誰ひとりとして、紡ぎ出す言葉に同じものがないため、とても興味深いです。

私は授業の一環として、大学生の立場から参加させていただ

いています。他の参加者からの意

見に刺激を受けると同時に、私

たちからも、大学生独特の貴重な

意見が提供できれば嬉しいで

す。KISの生徒のみなさんも、

中高生とは思えないほどの鋭い發

言が多く、とても感心させられま

す。また、臆することなく挙手

し、意見を堂々と述べる彼らの姿

勢は見習うべきところが多いで

す。やはり、私たちは、人目が

気にして、このような場で挙手・

発言することに遠慮がちですが、

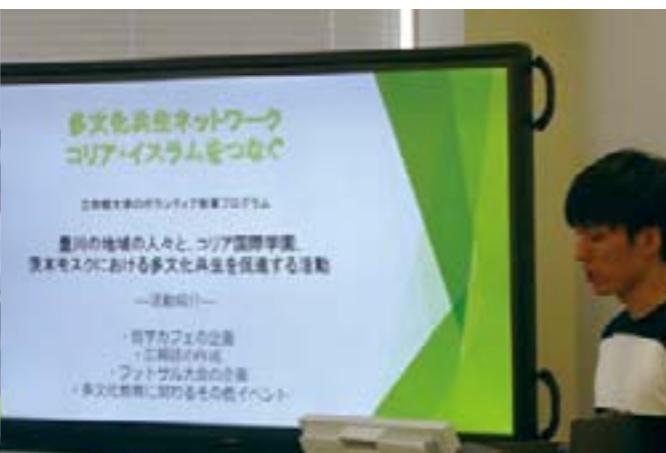
生徒のみなさんに負けないように

(笑)、どのような環境において

も、自身の考えをしっかりと持

ち、表現できる人間になりたいと

思います。



立命館大学 「シチズンシップ・スタディーズI」の活動 ～多文化共生ネットワーク 地域・コリア・イスラムをつなぐ

今年4月からコリア国際学園が受け入れ団体となり、立命館大学「シチズンシップ・スタディーズI」～「多文化共生ネットワーク～地域・コリア・イスラムをつなぐ」プロジェクトを受講する大学生5名がボランティア活動を行っています。この授業は立命館大学サービスラーニングセンターが開講する正課科目です。ボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を深めることを目的にしています(「受講ガイド」より)。ここでは受講生の大学生たちが、これまでの具体的な活動事例についてレポートします。



ムのことについて知ろう!』とい
うイベントが行われました。



と、そして立命館大学とコリア国際学園の交流をより一層深めることです。

当日の内容として、まず初めに、私たち立命館生の自己紹介や、ボランティア活動の紹介をし、その後に私たちが考えたグループワークを行いました。そのテーマは「もしあなただがKISの校長ならば、KISの課題に対して、どのように取り組み、改善していくですか?」というものでした。各グループでKISの課題を考え、その課題を改善するためにはどのような取り組みを行うべきかについてアイデアを出し合い、具体的な改善策を提案し合いました。そして各グループが全員の前で発表を行い、先生方からの評価を頂きました。

KISの生徒は積極的に、そして主体的に意見を交わしており、各班がそれぞれの個性を發揮して、とても興味深い内容になりました。その後にキャンパス内を見学することで、KISの生徒が「大学」というものを想像しやすくなつたのではないか。午後には、立命館大学で行われている夏期集中授業に参加し、1

歩5分ほどのところにある茨木モスクに移動すると、チャドルを巻いた女性が笑顔で迎えてくれました。モスク建設時に地域住民からの反対があつたことなど地域に受け入れてもらえるまでの過程や、イスラム教やイスラム教徒の生活について、講義形式で詳しく教えていただきました。

また、普段のお祈りのときに実際に使用されている、コーランという聖典を見せていただきました。辞書のようにとても分厚く、細かい字でたくさん書いてあるのに、イスラム教徒の方々はすべてのページの内容を暗記されていて、暗唱もしていただきました。とても和やかな雰囲気の中、イスラム教に対するイメージが少しずつ変化していきました。

立命館大学 キャンパスツアー・講義体験 将来を考える機会を提供

講義1時間30分という大学の講義体験を行いました。内容は「職業人生とは」。グループ別の大学生によるプレゼン発表にも高校生も参加しました。生徒たちにとっては今後の将来を考えるとてもいいきっかけ作りと、立命館大学や普段関わることがない大学生活を自身の目で見て感じる場を提供することができ、とても有意義で貴重な時間を過ごすことができました。

今後の活動に向けて

「多文化共生」の意義とは、多様な価値観や文化を共有し、理解し合うことで、お互いに助け合い、共に生きていくことです。グローバル化が進む現在、言語や文化、生活習慣や価値観が異なる人々との出会いは必然的になりつつあります。多文化共生の考え方を根付かせる場づくりが何より必要です。

具体的な計画としては、11月に豊川地域で行われるフットサル大会や、哲学カフェの企画運営を行う予定です。多文化共生が人々の生活において、少しでも確実なものになることを目指し、今後も積極的な活動を心がけたいと思います。

